March 2013

KIWC newsletter

辻井達一技術委員長の逝去

設立以来、技術委員長・副理事長としてKIWCを支えてこられた辻井達一さんが、2013年1月15日に81歳で逝去されました。KIWCでは心よりご冥福をお祈りするとともに、ご遺志を継ぐべく、湿地の保全と利用をより一層進めてまいります。

（追悼記事はP3）

地域の人々との活動

市民による環境調査
みんなで調べる復元河川の環境・2012
（平成24年度河川整備基金助成事業）

夏の調査

2012年7月28日、釧路川の蛇行復元区間の河畔で調査を行い、29名が参加しました。「水生生物」「堆積土壌」「植生」の3班に分かれ、KIWC技術委員の新庄久志さん、針生勤さん、高嶋八千代さん、照井滋晴さんの指導のもと、水生生物の捕獲や堆積土壌の構成調べなどを行いました。水生生物調査では、特定外来生物のウチダザリガニが100尾以上も捕獲され、参加者を驚かせました。また、蛇行復元部で氾濫がくり返され、河岸への土砂の堆積が進んでいることが、堆積土壌や植生の調査から明らかになりました。

調査の後はデータのまとめと考察を行いました。参加者に調査後行ったアンケートでは、「現場に多くの地元の人が訪れ、一緒に考えるという機会が本当に大切だと感じた」「今後の変化が楽しみ。続けて参加したい」などの感想が寄せられました。

KIWCでは釧路湿原の自然再生に関する理解を深め、生物多様性について関心を高めてもらうため、2010年から毎年夏と秋の2回、地元の人々と一緒に釧路川蛇行復元現場周辺（標茶町茅沼地区）の環境モニタリング調査を実施しています。2012年は（財）河川環境管理財団より河川整備基金の助成を受け、通水後3年目となる蛇行復元河道とその周辺の環境の変化について調べました。

秋の調査

2012年9月9日に、釧路川中流域の環境をカヌーで移動しながら調べました。小学生から70代までの26名が参加し、復元された蛇行河道から自然河川に続く5.5kmを下りました。参加者達には川下りの間に、河岸の様子や景観、動植物など、気づいたことや感じたことなどを自由に記録してもらいました。また、途中の上陸地点で、堆積した土壌の構成や砂州の大きさなどを調べました。

下船後は調査の記録を艇ごとにまとめて発表しました。自然のままの川で得られた、ヤマセミやミンク、沈木などの多くの「気づき」から、復元された河道が目指すのは、このように多くの生き物でにぎわう変化に富んだ水辺であることを確認しました。この日はあいにく雨天でしたが、「広々とした風景」「心地よい風」などの印象とともに、参加者は初秋の釧路川の自然を楽しんだ様子でした。

釧路湿原の写真コンテスト

釧路湿原の国立公園指定25周年を記念し、釧路湿原国立公園連絡協議会との共催で、「釧路湿原の魅力発信」をテーマに写真コンテストを行い、寄せられた95点の応募作品の中から、最高賞の「釧路湿原賞」をはじめ7点が入賞しました。

北原明寛さん「光芒射す水の大地」

これらの作品は2012年6月20日から8月29日にかけて、釧路湿原をかかえる釧路市、釧路町、標茶町、鶴居村内の6会場で巡回展示されました。また、一部の作品を、釧路湿原を紹介するポスターに採用し、同年7月に開催されたラムサールCOP11（ルーマニア・ブカレスト）の会場展示ブースで、釧路湿原の魅力を世界各国の会議参加者にアピールしました。

世界湿地の日記念　冬のエコツアー2013

2013年2月2日の世界湿地の日に、釧路湿原の塘路湖を訪れる「冬のエコツアー」を実施しました。24名が参加し、全面結氷した湖面を散策しました。エゾシカなどの野生動物の足跡や樹木の種を見つけたり、雪や氷の断面や亀裂の様子から湖が凍っていく過程を思い描きながら、自然からのメッセージの読みときに挑戦しました。湖面には人が乗ってもびくともしない厚い氷が張る一方で、湖畔の一角には7℃の温かな湧水が流れ込み、結氷していない浅瀬で小魚が泳いでいるのが見られました。散策後は湖で捕れたワカサギの天ぷらを試食し、湖で皆が見つけたものをふりかえるビンゴゲームで盛り上がりました。

真冬日のツアーでしたが、水・氷・雪と、釧路湿原の「水」のいろいろな姿にふれ、たくさんの発見もあり、今年の世界湿地の日のテーマ「湿地は水を育む」を実感した一日でした。

技術委員会の活動

生物多様性の観点からみた住民参加による水環境の修復

現地検討会

2012年10月4日、厚岸町民の森と浜中町の三郎川でKIWC技術委員会の現地検討会を開催し、委員・関係者が参加しました。

厚岸町では毎年「町民の森」で、住民参加の大規模な植樹祭が開催されています。植樹の費用には廃棄物リサイクルの収益の一部があてられ、森の下流にある別寒辺牛湿原・別寒辺牛川、さらには基幹産業の漁業の場である海の保全につながっています。今回は同年の植樹場所を訪れ、厚岸町担当者の説明を受けながら、周辺の環境や、太陽光発電で働くシカ除けの電柵・防除装置などを視察しました。

風連川水系の三郎川では、浄水場の取水堰の前に作られた、ダム式の魚道を視察しました。イトウなどの魚が産卵のため遡上しやすいよう、2008年に地元の酪農家らによりすべて手作業で設置されたものです。当時霧多布湿原センター館長として事業をコーディネートした河原淳委員に、魚道の仕組みや設置の経緯のほか、地元の理解と協力を得るための努力や、地域の人々を主役にした活動のため、勉強会の開催や協力依頼の方法など、具体例を紹介してもらいました。

視察後、委員らからは「ぜひこのような取り組みをもっと多くの人に知ってもらいたい」「これらのアイディアを、ほかの地域での活動にも活かしたい」などの感想や、住民向けの地道な普及啓発活動やコーディネーターの重要性を指摘する意見などが出されました。

報告書の発行

釧路地域における水環境修復の事例や、住民の参加を促すための工夫や提言をまとめた、KIWC技術委員会の2010～2012年度調査研究報告書「生物多様性の観点からみた住民参加による水環境の修復」を2013年3月に発行し、全国の湿地保全団体などに配布しました。入手ご希望の方は事務局までご連絡ください（本体無料・要送料）。

調査研究報告会

KIWC技術委員会が開催する調査研究活動報告会が、2013年3月22日、市民120名を集め釧路市内で開催されました。これは、3年毎にテーマを決め、技術委員が調査研究し報告書にまとめているもので、当日は市民向けの内容で報告を行ったものです。テーマは「生物多様性の観点からみた住民参加による水環境の修復」でしたが、報告書は委員長の逝去後に完成したため、報告会は故辻井氏の功績を振り返るとともに、報告書の完成を捧げる記念すべき一日となりました。

第1部追悼会では故人と親交の深かったラムサールセンターの中村玲子事務局長が、故人との思い出を語りました。後半の第2部報告会では、蛭田眞一委員、照井滋晴委員が釧路市内の春採湖に生息する外来種ウチダザリガニについて事例報告し、その後、環境省釧路自然環境事務所の竹中康進自然保護官が、釧路湿原を取り巻く地域での自然再生普及活動について紹介しました。後半には参加者との意見交換も行われ、春採湖の環境再生について、参加した市民から湖を守るための経験談や提案などが出されました。

日本のラムサール条約登録湿地 シリーズ21

くじゅう坊ガツル・タデ原湿原（大分県）

くじゅう坊ガツル・タデ原湿原は、くじゅう連山の山あい、大分県竹田市の坊ガツル湿原と、九重町のタデ原湿原を指す国内最大規模の中間湿原です。91haの面積のうち、53haが竹田市、38haが九重町にあり、登録地の全域が阿蘇くじゅう国立公園特別保護地区及び特別地域に含まれています。2005年11月にラムサール条約に登録されました。

坊ガツルにはヌマガヤ-ヒメミズゴケ群落、ヌマガヤ-ヌマクロボスゲ群落、ヤチカワズスゲ群落、タデ原にはヨシ-アカバナ群落、ヌマガヤ-ヒメミズゴケ群落、ノリウツギ-ヒメミズゴケ群落等が成立しており、その他にもツクシフウロ、シムラニンジン等希少な植物の生育が確認されています。春から秋にかけて色とりどりの花たちが咲き誇り、私たちの心を温かくしてくれます。タデ原湿原と周辺の森林内には自然研究路が設置されています。木道はバリアフリー設計で、誰でも自由に散策することができます。

現在の気候下では、湿原は何もしないで放っておくとノリウツギやクロマツが侵入し、森林に移行してしまいます。それを防ぎ、希少な植生を保持していくため、地元の人々により毎年春に湿原を含む一帯の野焼きが行われます。また、近年では湿原内に外来植物のオオハンゴンソウが侵食してきており、地元の方やボランティアの力を借りて、毎年駆除作業を行っています。湿原を愛するたくさんの人たちに支えられながら、タデ原湿原は美しい姿を保っているのです。

九重町の山々は四季をとおして違った姿を見せてくれ、またその姿は色に例えて表現されます。春は黒、夏は緑、秋は赤、冬は白。春の黒は、野焼きにより一面真っ黒になる姿。夏の緑は、山々に芽吹く新緑を。秋の赤は、色とりどりの赤色に染め上げる紅葉。そして冬の白は、全てを真っ白に覆ってしまう雪。どの季節にも特徴があり、非常に見ごたえのある光景です。そのどれにも、タデ原湿原は静かにそしていきいきと寄り添い、これからも私たちにその姿を見せ続けてくれることでしょう。

野焼き（左）と野焼き後（右）

（文、写真　九重町危機管理・町民安全課）

発行：釧路国際ウェットランドセンター（KIWC）
〒085-8505　釧路市黒金町7-5　釧路市役所内　KIWC事務局
TEL：0154-31-4594　FAX：0154-23-4651　電子メール：kiwc@kiwc.net
ホームページ：http://www.kiwc.net　「こどものページ」：http://www.kiwc.net/child/

JICA 集団研修

地域における生物多様性の保全と持続的利用コース

2012年5月14日から6月26日まで、国際協力機構（JICA）集団研修「地域における生物多様性の保全と持続的利用」コースを受託し、フィリピン、タイ、ベトナム、アルバニア、マレーシア、ウガンダの6カ国から7名を受け入れました。

研修員は、亜熱帯の沖縄から亜寒帯の北海道にいたる5地域の多種多様な湿地を訪れました。また、行政機関やNGO、地域住民などさまざまな関係者から、里山の利用や環境教育、エコツアーなどの実例を学び、地域住民を主役とした生物多様性の保全と持続可能な利用のしくみづくりについて意見を交わしました。研修プログラムの中には、湿地植物を利用した水質浄化に取り組んでいる高校の視察や、渡り鳥と共生する米作りに挑んでいる農家や自治体関係者との懇談などの機会を設けました。

日本で得た知識や経験を自国の湿地保全事業に活かすため、研修の最後に研修員から帰国後のプロジェクト案が発表されました。地域住民を対象としたワークショップや普及啓発イベント、生物多様性に関するデータベース作りなど、多くのアイディアが出されました。

JICA 集団研修

自然・文化資源の持続可能な利用（エコツーリズム）コース

2012年8月27日から10月1日まで、JICAの集団研修「自然・文化資源の持続可能な利用（エコツーリズム）」コースを実施しました。地域の自然や文化を資源として持続的に活用する方法として、自然や社会に配慮し、その自然や文化に接しながら旅行する「エコツーリズム」を学ぶため、アルゼンチン、ケニア、タイ、ウガンダ、バヌアツ、ベトナムの6カ国から7名が参加しました。

研修員はまず東北海道の自然の中で、ガイドツアーやカヌー、漁業・酪農と連携した観光プログラムなどに参加し、ツアーにおける環境への配慮や普及啓発、モニタリングの大切さなどについて学びました。その後、東京・京都を訪問し、伝統文化や里山を素材としたエコツーリズムにも触れました。研修中には大学生とのワークショップや一般家庭へのホームビジットなど、日本のさまざまな世代の人々とふれあう機会もありました。

研修の最後には、研修員から具体的なエコツーリズム振興策が発表されました。地元ガイドの養成や国立公園の整備計画、農村ホームステイツアーなど、各国の事情に合わせた、さまざまなプランが示されました。

湿地をつうじた国際協力

AUSTRALIA湿地

オーストラリア湿地関係者と懇談

ルーマニアで開催されたラムサールCOP11開催期間中の2012年7月8日、会場のブカレスト「国民の館」で、オーストラリアの湿地関係者と懇談しました。姉妹湿地であるオーストラリア・ハンター河口湿地にあるハンターウェットランズセンター理事、湿地保全NGO・ウェットランドケアオーストラリアのハンター地域コーディネーターと、姉妹湿地間の今後の技術交流について、具体的な交流案を出しあいました。

姉妹湿地との写真交換

ウェットランドケアオーストラリアでは、毎年2月2日の「世界湿地の日」行事として、湿地の写真・アートの全国コンテストを行っています。このコンテストのこれまでの入賞作品と、釧路湿原の写真コンテストの応募作品合わせて54点を、2012年11月19日から22日まで釧路湿原の塘路湖エコミュージアムセンターで展示しました。

また、釧路湿原の写真コンテストの作品は、オーストラリアの姉妹湿地・ハンター河口湿地にも送られ、同年11月末、また2013年2月に写真展が開催されました。

ANZALI湿原

イラン・アンザリ湿原環境管理プロジェクトカウンターパート研修

JICAのアンザリ湿原保全プロジェクトの一環で、2012年6月18日から20日までイラン環境庁職員2名を受け入れました。研修では釧路湿原の保全や普及啓発に係わる行政関係者、NGO、市民ら9名とのワークショップを開催し、アンザリ湿原の紹介や、釧路側参加者による釧路湿原との関わり方について、目標や課題などの発表が行われました。

また、研修中は釧路湿原の視察や、KIWC、JICA関係者との釧路・アンザリ湿地間の技術協力と国際交流に関する意見交換も行われました。

アンザリ湿原関係者との会合

ラムサールCOP11期間中の7月7日、ルーマニア・ブカレスト市内で、KIWC事務局長ら2名と、アンザリ湿原保全関係者との会合が開かれました。イランからは環境庁自然環境局の副局長、UNDP／GEFプロジェクトのイラン国内マネージャーをはじめ4名が出席、JICAスタッフも同席しました。話し合いの中で、釧路湿原とアンザリ湿原との交流促進のための具体的な計画やスケジュールについて意見が交わされました。

ISSUED BY KUSHIRO INTERNATIONAL WETLAND CENTRE

ラムサールCOP11開催される

2012年7月6日から7月13日まで、ルーマニアの首都ブカレストでラムサール条約第11回締約国会議（COP11）が開催され、締約国の代表団や湿地保全NGOなど約180機関が参加しました。今回の会議テーマは「湿地とツーリズム」で、湿地の価値やワイズユースの視点に立った観光の推進について議論されたほか、観光資源としての湿地の魅力に着目した展示やイベントなども行われました。

会場ブースでの広報活動

KIWCはオブザーバーとしてCOP11に参加し、展示ブースを設けて、釧路地域の4つのラムサール湿地における保全とワイズユースについて広報活動を行いました。会議テーマにあわせ、釧路地域の漁業や農業と連携した湿地ツアーや、途上国向けのエコツーリズムの研修などを紹介しました。

ブース内にはポスターのほか、折り紙作家の賀勢朗子さんが製作したエゾシカやシマフクロウの模型、湿原の花々なども展示され、会議参加者の目を引きました。タンチョウの折鶴や紙飛行機キットなどにも人気が集まり、環境教育の素材や記念にと持ち帰る人が続出しました。最後に、折り紙作品はラムサール中央・西アジア地域センターへ、ポスターの一部は同東アジア地域センターに贈呈し、活用を依頼しました。

また、KIWCが実施したこれまでの研修や国際会議の参加者もブースを訪れ、旧交を温めあいました。

ラムサールで国際ワークショップ開催

ラムサール条約地域センター主催の湿地や生物多様性保全の国際ワークショップが、2013年2月25日から4日間、イラン北部のラムサールで開かれました。ワークショップには中央・西アジア地域のラムサール条約加盟国26か国から専門家や実務者約60名が集まり、ラムサール条約の採択のため調印式が行われた同じ会場で事例発表が行われました。この場にKIWCの菊地事務局長がワークショップ講師として参加し、釧路地域の湿地管理の現状や地域の湿地保全やエコツーリズムの取り組みについて講演しました。

釧路地域で行われたJICAイラン国実務者研修で、両者の交流について話し合ってきましたが、今回、事務局長がギラン州知事や環境省局長と面談し、アンザリ湿原合同管理委員会などとの将来の交流により、湿地を守るためにお互い何ができるか話し合いました。

辻井達一氏を偲ぶ

2013年1月に逝去された辻井達一技術委員長（副理事長）は、長年にわたる湿地保全への功績に対し国内外から表彰され、多くの方々から祝福を受けられたばかりでした。今後ますます活躍が期待されていただけに残念でなりません。

辻井達一さん 略歴
1931年東京生まれ。1959年北海道大学大学院博士課程修了（農学博士）。
1960年、北大農学部講師、同助教授を経て1985年農学部附属植物園長、1988年教授、1995年北星学園大学教授。この間、パタゴニア、シベリア、タクラマカンなど世界各国を調査。
2002年北海道功労賞、2012年北海道新聞文化賞受賞。
2013年まで、北海道環境財団理事長、霧多布湿原センター館長。
「北海道の湿原」（編著）、「日本の樹木（正・続）」など著作多数。

ラムサール賞の受賞

2012年7月6日、ルーマニア・ブカレストで開催されたラムサールCOP11の開会式で、湿地の保全と持続可能な利用への貢献を讃える「ラムサール賞（科学部門）」が、辻井達一KIWC技術委員長へ授与されました。日本人では2人目の受賞となります。

辻井委員長は長年にわたり、釧路湿原やサロベツ原野の保全、インド・チリカ湖の自然再生等事業への協力など、国内外の湿地保全活動をけん引してきました。受賞のスピーチでは美しい水辺への思いなどをユーモアたっぷりに語りました。

受賞スピーチ（和訳）

湿地にかかわるみなさん、こんにちは。
この4月で私は81歳になりました。湿地の研究を始めたのは20歳のときでしたので、この世界で人生の60年間を過ごしてきたことになります。
その間、数えきれないほどたくさんの友人を得ることになりました。その友人の多くの方々に、本日ここでお会いすることができ、幸せでいっぱいであります。
日本では、「河童」という神話上の生き物は、自然が保たれた河川や湖水に住むと信じられています。蛙と同じですが、河童も水かきを持っています。実は、私も長年湿地の研究を行ってきましたので、私の足にも水かきが生えてきてもいいのではないかと思うことがあります。河童は清らかな水を好む湿原の守り神であります。その役目は、今後私が続けていきたいことでもあり、みなさんにも同じ仕事を担っていただきたいと、切望しております。
ありがとうございました。

ラムサール賞受賞・瑞宝小綬章受章記念講演

辻井達一技術委員長のラムサール賞受賞と瑞宝小綬章受章を祝う会が、2012年11月21日に釧路市内で開かれ、あわせて記念講演が行われました。辻井委員長は「ラムサール条約登録湿地これから」と題して、琵琶湖産の「鮒ずし」や泥炭で燻蒸するウィスキーなど、湿地の恵みが地域に大きな利益をもたらす例を紹介しました。そして、環境に配慮し、湿地の持つ価値の「利息」の部分だけをうまく使えば、保全と経済活動を両立させられると話しました。

また、北海道東部を世界的にもまれな、多様な湿地が集まる「博物館」としてもっとアピールし、観光などの産業にも活かすべきだと強調しました。